

崎山 理

民博名誉教授

追悼

和田祐一先生は、一九七四年、民博創設と同時に着任され、言語展示の企画と設計の責任者として大きな仕事をされた。文字なら分かりやすいが、言葉はいかに「展示」するか、先生の考案された言語装置はこれまでずっと来館者の注目を集めてきた。事実、世界の「民族博物館」で言語地図や文字ならともかく、民博のような言語展示があるのを私は知らない。

開館当初の語順装置は、最近まで駅や空港で行き先や時刻の案内に使われていた表示板式であった。一九あるどれかひとつの言語のボタンを押すと、「少年は父に手紙を出した」という文の四要素の書かれた板がパタパタとめくられて所定の位置で止まる。ただし、この装置は十数年後に改修され四要素の書かれた箱がコトコトと導線を並行移動するものになり、言語数も三へと増えた。

現在は撤去された発音装置には唇、舌喉ひこを動かすための巧妙な仕掛けが工夫されていた。これら装置は、大変機械好きであった先生のアイデアから生まれたのである。

しかし、このようなメカニカルな装置は頻繁なアクセスで故障が多かったこと

も事実である。一九九〇年、先生のご退官後、第七展示棟増設の折に言語チームも言語展示を見直し、語順装置をコンピュータ制御による大型の電光パネルに変えた。文例も「おばあさんは子どもに昔話を語った」に改め、言語数は一挙に九六に増やした。

一九九六年、新展示棟の竣工式に出席された先生が新装置をご覧になったとき、私は文例を変えたことを気にしていたのだが、最初に口にされたのは、「語順が現れるのがパツパツと速すぎ自分で考えている間がない」であった。確かに、パタパタ、コトコト式より瞬間的に語順が表示される。私は返す言葉がなかった。

先生は、博物館はモノを見て考えるところ、という立場に徹しておられたのである。和田先生のご出身は言語学ではなくフランス文学であったが、京都人類学研究会（通称、近衛ロンド）で人類学的分析に基づく言語研究の方法を究められたご経験が長い。先生はいつも物静かで若造の話にも批判めいたことは言われなかったが、独特の苦笑いは「それは困るな」というリスボンスであった。

ただ一度、民博の特別研究「日本民族文化の源流の比較研究」シンポジウムで

一九八六年、私が受け持った「日本語の形成」に先生のご参加もお願いしたところ、そのようなことは自分が去ってからはしてもらいたい、というにべもないお返事であった。日本語系統論者にはしばしば見られるデスマッチに関わることを警戒されたのだと思う。私は国内外からの参加者や発表内容を説明し、ようやく納得され座長も承諾してくださった。このシンポジウムは成功裡に終了し、報告書も刊行されている。

ご自身による蝶の採集とコレクションは趣味というよりプロ級であったようだ。時どき、どこそでオークションがある、と言っておられた。

先生は本年三月、享年八二歳で鬼籍に入られたが、梅棹忠夫顧問に知らされたのは五月になってからで、われわれが計報に接したのはさらにその後である。まことに静かな逝かれかたであった。今は胡蝶となり栩栩然（楽しく）と天を飛んでおられることであろう。ご冥福を心からお祈りします。



新着図書を前にした和田祐一先生

友枝啓泰 民博名誉教授を偲ぶ

二〇〇九年八月二七日逝去

享年七三歳

藤井 龍彦

民博名誉教授

本年（二〇〇九年）九月二、三の両日名古屋の南山大学において「日本ペルー民族学研究五〇周年記念事業・日本とペルーの媒介者たち」という研究集会がおこなわれた。昨年は、第一次の東京大学アンデス地帯学術調査がおこなわれてから五〇年ということ、東京やペルーのリマで大規模な催し物がおこなわれた。

さらに今年も、一九五九年に当時東京大学文化人類学教室の大学院生であった佐藤（当時は三浦）信行氏が、クスコ近郊のチンチエロで住み込み調査をされてから五〇年にあたる年であった。この催しの発案者が友枝啓泰さんであったが、残念ながら彼の姿はそこになかった。

集会は二人のペルー人（歴史学者と画家）と約二〇名の日本人の民族学研究者が集まるという、かつてない規模のものであった。加えて会場の壁面には、友枝さんの、四〇年以上にわたったペルーでのフィールドの写真が展示された。東大大学院の木村秀雄さんによる基調講演「日本における民族学五〇年」はもちろん、その他の報告の随所に、友枝さんの思い出がちりばめられ、期せずして友枝さんへの追悼の意を伝えることになったのは当然であろう。

思い起せば、友枝さんとは長いお付

き合ひであった。一九六六年、横浜からペルーの首都リマの外港カリヤオへの長い航海の後、埠頭で出迎えていただいたのが最初であったのだから、四〇年以上になる。

その後の三カ月にわたるワヌコでの発掘生活が終わり、友枝さんは石田英一郎教授により新設された埼玉大学の文化人類学教室に赴任された。その後しばらくは、友枝さんの関心がアンデスからアマゾンに移っていたこともあり、お目にかかる機会もなかった。

一九七四年に民博が創設され、わたしも第四研究部（担当アメリカ地域の一員として新規に採用された。数年後——）たぶん一九七六年だったと思うが、友枝さんが民博にこられると聞いたときは、展示場の一般公開を控えていたこともあり、大いに勇気つけられたことを思い出す。

それ以来、展示のみならず、共同研究現地調査などのあらゆる機会を通じて、友枝さんにはいろいろと教えていただいた。友枝さんの思い出は限らないが、いちばん印象に残っているのは蝶の採集である。いつの調査のときであったかはつきり覚えてはいないが、当時民博で蝶の収集家として知られていた和田祐一さんの教えを請い、採集用具一式をもってア

ンデスへ行ったことがある。「なぜ蝶を？」と伺うと、「アンデスの高山蝶はけっこう良い値段がするので、高地の農民に蝶をとらせれば彼らの収入になる」というのである。一時が万事。友枝さんにとっての中央アンデスは、単なるフィールドではなく、あたかも自分の親戚のように感じていたのである。

友枝さんがフィールドワーカーとして優れた才能を発揮されたのはご承知のとおりであるが、カメラマンとしての腕もなかなかのものであった。数年前、広島市立大学をお辞めになったのを機会に、四万枚以上のスライドを南山大学の人類学博物館に寄贈された。現在までに半分近くがデジタル化されており、近い将来の公開が期待される。

アンデス高地の牧民が、リヤマのキャラバンによる交易の旅をするとき、一頭の雄のリヤマが先導する。美しい刺繍が施された飾り布をつけ、胸に鐘をつけたこのリヤマは「デランテロ（先達）」とよばれる。我々は、長いあいだアンデスの民族学研究のデランテロであった友枝さんを失ったが、南山大学での友枝さん追悼集会に参加した全員が、これからもいつそ調査・研究に励むことをお誓いしたのであった。



ペルー研究者ルイス・ミリョネス氏を民博に迎えて記念写真におさまる友枝啓泰先生（右端）と筆者（左端）（提供・加藤隆浩）